

「千の風になって」の原詩の誕生秘話を知っていますか？

N H K 紅白歌合戦でテノール歌手：秋川雅史が歌唱したからか、「千の風になって（原題： Do not stand at my greave and weep）」がシングル売り上げでオリコンチャート1位になり、TVのワイドショーでも取り上げられている。

この詩は、I R Aのテロで命を落とした青年が、「私が死んだときに開封してください」と両親に託した手紙の中に入っていたり、マリリン・モンローの25回忌に朗読されたり、9・11の同時多発テロで、父親を亡くした11歳の少女が追悼式で朗読したこともあり、世界中に広く知られたよう。

詩の作者は不明ということであるが、最近、アメリカ人女性：Mary Frye（1905.11.13.～2004.9.15.）によるものであったと云われているよう。

その詩の誕生の秘話は、女性の若い頃のドイツから来たユダヤ人の友は、祖国に残った母がその後亡くなったが、ドイツの情勢が反ユダヤ人に向かっており帰国もままならず、「母の墓標の前に立ってさよならを告げる事が出来ないのが、一番悲しい。」と泣く友に、側にあった紙袋に一息に込み上げる想いを書き付け、「これ、私の思う“人の生と死のあり方”なの。あなたのためになるかどうか分からないけど。」と差し出したのがこの詩。

一方、日本では新井満が訳詩・作曲し、しかも以前から歌われているが、新井満が作曲するに至ったのにも秘話が……。

故郷の友の奥さんガンで亡くなり、その追悼文集の中に「千の風」の翻訳詩を見つけて感動し、歌にして歌えば、友や3人の子供たち、また、残された仲間たちの心をほんの少しくらいは癒すことができるのではなかろうかと、原詩となる英語詩を探し、彼流の日本語訳詩を作り、それに曲をつけて歌唱したのが、この「千の風になって」。

最初は、私家版のCDを数枚だけプレスし、そのうちの一枚を友に送ったとか。

日米の奇しくも同じように友を気遣う詩・曲の誕生の背景を知ると、詩の一言、一言が、深い想いのある言葉として伝わってくる。

私は、1年半前に読んだ本（「雑学BN」の書籍等読後感関係（Ⅱ）P、2005.06.11.「この『やるせなくなる』気持ち、どこからくるのか…」：参照）の中で、娘を亡くした両親が毎日この曲を聴いて癒されているとの記述を目にして、CD「千の風になって」の存在を知り、直ぐに新井満のCDを購入して、時々聴いていた。